

令和五年度 平和文集

「いま、語り継ぎたいこと」

戦争と平和

東大和市

NO WAR
Peace City Declaration since 1990 Tokyo Higashiyamato City

Additional text on the banner includes: 平和 (Peace), 戦争 (War), 世界 (World), 東大和市 (Tokyo Higashiyamato City), and various handwritten signatures and dates.

く恒久平和を願ってく

「いま、語り継ぎたいこと」

く戦争と平和く

発刊にあたって

この平和文集は、東大和市民の皆様のご戦争体験を後世に伝え、平和の大切さを広く市民に訴えることを目的として、平成十五年度から、発行しているものです。

今年も、戦争を体験した市民の皆様のご思いをお寄せいただき、また、小学生及び中学生の皆様からも、戦争のない平和な世界を願う作文を届けていただきました。

東大和市では、平成二年十月に「東大和市平和都市宣言」を行い、平和を愛する全世界の人々と手を携えて、戦争と核兵器のない世界

の建設にむけて努力することを誓いました。

この平和文集が、多くの市民の皆様の心に届き、恒久平和の実現の一助となることを願っております。

本文集の発刊にあたり、原稿をお寄せいただきました皆様並びにご協力いただきました関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

令和五年八月

東大和市長 和地 仁美

目次

戦争体験記

戦時下の五歳の私	大谷 寿々江	1
平和を願う	久保 松實	5
戦争の記憶	清水 紀久子 (笠井 悦子)	9
大東亜戦争	進藤 和夫	12
さつま団子汁	関田 八重子	13
小学生のころの戦争体験記	松本 和子	16
学童疎開の事	横尾 和子	26
小学生の作文		
戦争や平和について聞いたこと、知ったこと、思うこと		31

中学生の作文

戦争や平和について聞いたこと、知ったこと、思うこと ……

64

東大和市平和都市宣言 ……

70

東大和市戦争体験映像記録

「沈黙の証言者」～私たちのまちは戦場だった～ ……

72

平和文集について

※氏名の五十音順で掲載しています。

※編集に当たっては、基本的に原文のままとしています。

※七人の方から戦争体験記を、十三人の小学生、一人の中学生から作文をお寄せいただきました。

戦争体験記

第二次世界大戦（太平洋戦争）の戦争体験記

戦時下の五歳の私

大谷 寿々江（八十四歳）

当時私は五歳、小学生のお友達と鶏頭の花がきれいに咲いている小道を走りぬけて、五歳にしては遠くの公園で遊んだり、お堀の土手にみんなで座って、甘い汁が出る草をかじったりして楽しく遊んでいた。しかしある時から年上のお友達が学童疎開でいなくなってしまった。あんなに楽しかったのに、あき子ちゃんと二人だけになってしまった。池に泳ぐ鯉を見てたり、椿の花が咲いている木のそばで淋しく遊んでいた。夜になると空襲警報のサイレンがよく鳴った。ある日、夜の空が真っ赤になっていたのを見た。消

防自動車が半鐘を激しく鳴らして、行ったり来たりして、あの夜見た真つ赤な夜の空は、今も忘れられない。あの日が三月十日の東京大空襲の日だったのだろう。

ある日、防空壕の中から大きな飛行機が低空飛行で編制を組んでゆうゆう飛んでいくのを見た。ある夜、弟をおぶった母が「今日はだめかもしれない」と言っていた。私は、そんな母に無心でついていった。小さな子どもは、神社の境内の防空壕に入った。大人たちは、神社の境内にいて、家々が燃えていくのを見ていた。ものすごい光景だったという。そして、どこまでも続く焼け野原となってしまった。私は燃えて何もなくなってしまった自分の家の焼け跡に座り込んで、少し離れたところの、ある家族をずっと見て

いた。その家族のひとりが長い筒を持っていた。「あの筒の焼夷弾が、あき子ちゃんのお母さんの背中に当たったんだよ」と聞かされた。私は、いつまでもその家族の人たちを見ていた。その家族の光景は今も消えない。そこには、あき子ちゃんの姿がなかった――。

大人になって幼い頃を過ごした思い出の地を尋ねることが何度もあったが、私はいつもあき子ちゃんに会えないかなと思ってしまう。そして、椿の花を見るたび、あき子ちゃんを思う。

その後、見渡す限りの焼け跡となってしまった生まれた土地を離れ、母の実家に越した。そして戦争が終わった。年上のお友達は学童疎開から、やせ細って帰ってきたとい

う。

その翌年、私はその当時の国民学校の一年生になった。私はあの戦時下を、また、戦後を両親に守られて今があると思う。

当時の大人たちは皆、戦中、戦後を懸命に乗り越えて来たのだろう。

戦争は、二度とあってはならない。
戦争は、命を守ることができない。

平和を願う

久保 松實（八十六歳）

私は、昭和十一年、佐渡で生まれました。

父は、明治八年生まれの海軍特務少尉で、横須賀で戦艦三笠の引き揚げを行う時、上官の大役を仰せつかったと言っていました。三笠は、横須賀で見学することができます。

父は、佐渡在郷軍人会長をしていました。昭和九年に兄が生まれた時、山の方から町役場のすぐ前に大きな家を築きました。元上官であった軍人さんが佐渡見物にいらした際、家に泊まっていただけ、名所をハイヤーで案内し、私たち家族もご一緒して楽しかったです。

父は、兄と私が通っていた国民学校の行事に、肩にモールの付いた式服と金ピカのサーベルを着けて、長い顎鬚で来賓していました。

父の信条は、「狭い船の生活でしたので、「物には定所有り、定所には物有り。」ときちんと整理し、きれいにしていました。

私たちにも厳しい人でした。

長年軍人でしたが、大きな戦争には参加はしなかったそうです。

日本の戦争の時は、弟が母のお腹にいて、大きなお腹をかかえて防火訓練、バケツリレーをして大変そうでした。ガラス戸に厚紙（和紙）を「×」に張り、電球に黒袋を

かけて光がもれないようにして寝ました。庭には防空壕をつくり、警戒警報時は防空頭巾をかぶり、壕に入り、B 29の飛行機の音に怯えていました。

昭和三十四年に父が亡くなり、戦前、戦後は母が兄、私、弟を育てるのに、着物、掛軸、屏風、父の勲章その他の品をお金に換え、港までバスで行き、魚を買って山の方に売りに行き、お米や野菜を分けていただきました。貧乏生活で、兄も私も新聞配達をして働いたり、薪を背負って町のお店で少しのお金をもらっていました。

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻、スーダン内戦等、なかなか終わりそうもありません。

死者が多く、心が痛みます。戦争は、一（マイナス）は

多いが、＋（プラス）は無いと思います。
早く平和な世界になることを心から願います。

戦争の記憶

【戦争体験者】 清水 紀久子（九十二歳）

【執筆者】 聞き書きボランティア 笠井 悦子

終戦の時、私は十四歳。島根県の旧制県立大田高等女おおだ学校の二年生でした。私の学校は広島県の隣県に在ったこともあり、戦争中から学校の半分は広島第一陸軍病院の大田分院として使われていました。

昭和二〇年八月六日に広島に原爆が落ちてからすぐに大田駅に原爆で負傷した兵隊さんが運ばれてきて、その日から私たちの学校は陸軍病院となり、授業はなくなりまし

た。そしてその時はまだ、広島に落ちた爆弾が「原子爆弾」だなんて知りません。分かったのは、もつと後になってからでした。

列車で運ばれてきた兵隊さん達、それはもう沢山の人で、最初は戸惑いしましたが、私たち女学生は五人一組で、一人は日傘をさし、四人は担架を担ぎ、駅から学校まで三〇分はあつた道を運びました。ただれて化膿した傷口からはウジ虫が湧き、深い傷口や鼻、耳から、それが出たり入ったりしていたのを今でも強く覚えています。真夏だったので、化膿するのが早かったです。

負傷兵の手当ては衛生兵と国防婦人会の人たちが行い、私は兵隊さんのベッド代わりにしていた、膿がいっぱい

いて汚れたシャツや毛布を川で洗ったこと、また、亡くなった兵隊さんを衛生兵が棺桶に入れるときに、棺桶のサイズが合わなかったせいか、脛を「ボキツ」と折って入れていたことが印象に残っています。

今年、戦後七十八年になり、私は九十二歳になります。現在、八十歳の人でも、終戦の時は二歳ですから、戦争のことを覚えていないでしょう。

学校で太平洋戦争（第二次世界大戦）のことを学んでいるとしても、昔話だと思われるかな？と思うと、恐ろしくなり、私の経験したことを伝えておかなくてはいけないと思いました。

大東亞戦争

進藤 和夫（九十三歳）

海軍少年飛行兵に志願、愛知県岡崎海軍航空隊、九州人
吉海軍航空隊で訓練した。

兄は長年軍人で、フィリピンで戦死した。

さつま団子汁

関田 八重子（八十六歳）

戦争中の食事はどうだったか、全然覚えていません。戦後の食糧のない時に思い出されるのがいくつもあります。お弁当は麦ごはんに梅干し。各々包んである布、新聞紙等で中身をかくしながら食べました（裕福な家は違うと思います）。たまにお弁当を作ってもらえない時は、休み時間に家まで食べに帰ったこともありました。家でさつま芋のごはんだったり、さつま団子汁でお腹を満たし、また学校に戻る。そんな生活が続きました。

さつま団子汁は、さつま芋の粉を水で耳たぶぐらいにこ

ね、手で握って、大根、葱等の具の入った鍋に醤油で味付けしたものです。汁は薄味。さつま団子はぼんやり甘く、お代わりはできたものの、水分でお腹を満たす状態でした。

さつま芋は農林一号といって、水分が多く、洗った後、むしろを庭に出し、何日か太陽に当てました。さつま芋の葉の茎は、切り取り炒めたり、春にはあかぎ、はこべを摘みに行き、ごはんのおかずとしました。山つつじの花の蜜をなめたり、チガヤの花穂かすいが柔らかく甘味があるので、おやつがわりにしました。

その頃、なかなか大きくならない私を心配した親が、役場に出向いて下さるお医者さんへ連れていき、診てもらい

ました。後になって教えてもらった話は、「この子は六年
生まで生きられるかどうか・・・。」と言われたそうです。
今、永らえていられるのは、両親のおかげなのかな。

小学生のころの戦争体験記

松本 和子（八十七歳）

昭和十一年生まれ、満八十七歳です。横浜で生まれま
した。

太平洋戦争が始まったときは、五歳ごろだったので覚え
ていることは少ないです。

生まれた家での記憶は、そばに大きな公園があったこと
です。親の話によると、山下公園のそばの大きな豆腐屋さ
んの二階に、両親と兄弟九人で住んでいたそうです。

後から親に聞いたのですが、おじさんとおばさんが終戦
後に家を見に行ったそうです。辺り一面焼け野原になっ

ていて、豆腐屋さんがどこにあつたか全く分からなかった
そうです。ところどころに焼け残った柱を積んでいたそう
で、二度と見たくないと話していた記憶があります。

戦争が始まり、疎開しようということになったそうで、
立川に親戚が何人かいたので、家族全員で立川の柴崎町へ
引っ越してきました。覚えているのは、母親達と一緒に電
車に乗ったことです。

新しい住まいは、立川駅の南口で、今でいうところの駅
近物件の借家でしたが、近くに立川飛行場があるので、空
襲される心配がありました。近所の人たちと相談した結果
だと思いますが、強制疎開することになり、富士見町へ引
っ越しました。

その時、布団や身の回りの必要な荷物をリヤカーに積めるだけ積みこみ、父親がリヤカーを引きながらみんなで運びました。

持っていていけないひな人形を燃やした記憶は今でも覚えていません。今思うと、高価なひな人形だったので、もったいなかったと思います。

富士見町へ引っ越してきてすぐに、今度は防空壕がないからと、錦町の市役所のそばへ引っ越しました。市役所の周りは桑畑でした。

いつもお腹がすいていたので、七、八人の子どもたちと一緒に桑畑の中へ黙って入り、どどめ（桑の実）を取って食べた記憶があります。食べた子はみんな口の周りを紫色

にしていました。

また、暑い日は、友達数人と多摩川で泳いだりしていました。多摩川へ行く途中に、今は奥多摩へ向かう道路になつていますが、スイカや梨を栽培していた大きな畑がありました。ある日、友達七、八人で多摩川へ泳ぎに行く途中、みんなお腹がすいていたので、男の子が一人棒を持ってスイカ畑に入り、スイカをとろうと言いました。男の子は、スイカ目掛けて棒を振り下ろしたようでしたが、「いてえ」と大きな声がして大変驚き逃げ出しました。畑からは、タオルを頭にかぶったおじさんが、こちらに向かつてカンカンに怒って、怒鳴っていた記憶があります。

家に帰ってから親にこの話をしたところ、とても怒られ

たことを覚えています。

その日から一週間程が過ぎたころ、やっぱりお腹がすいていたので、男の子が友達みんなを連れてスイカ畑へ行こうということになりました。畑についたところ、この間のおじさんが出てきて、「スイカ泥棒なんかするもんじゃねえ、スイカだって泥棒だぞ」と言い、スイカを一つ手渡ししてくれました。みんなで大喜びです。貰ったスイカをみんなで食べて、とっても美味しかったことを覚えています。

わたしは、九人兄弟でしたし、同級生もみんなとにかくお腹がすいていました。

引っ越した家は、二部屋しかなく、そこに親と兄弟とが寝るのですから、手や足がぶつかることがあります、よくケン

カをしていました。

小学校のお昼は、コッペパンと牛乳が給食で出ていましたが、これではお腹がすくので、母親がお弁当をよく作ってくれました。子どもが多いので、七つ作っていたと思います。一度に三升のお米に、グリーンピースと少しの塩を入れて炊いたご飯をお弁当箱に入れるだけのものでした。お弁当を持ってこられない子は、パンと牛乳だけでした。だからなのか、痩せている子供たちが多かったです。

お米は、母親が持っていた着物類を農家へ持っていき、お米に換えてきていました。

ある時、父親が知り合いの憲兵さんから、ザラメの砂糖をたくさん貰ったことがあります。母親がそれを農家へ

持っていていき、お米に換えてきてくれたので、そのお米に大根と大根の葉を入れて、塩味でお粥を炊いてくれました。その時はお代わりしていいよと言われ、美味しかったです。

お米は、炊飯器がないので、薪を使って釜で炊いています。底の方におこげができるので、母親は、そのおこげに刻んだ沢庵を入れておにぎりを作ってくれました。とても美味しかったです。

ある時、学校の宿題を忘れた子どもたち五人が、水を入れたバケツを先生に持たされ、廊下に立たされたことがあります。その時、空襲警報が鳴りましたので、みんな避難しました。家で母は、娘がまだ帰ってこないと言って、待っていたそうです。わたしは、学校の廊下でみんなとバ

ケツを持って立っていました。あとから聞いたのですが、先生は忘れていたそうで、親に怒られたようです。

町内会で防空壕を掘ったのですが、結構深く掘っていて湿気が多く、長い時間入っていると気持ちが悪くなりました。その防空壕に小さな窓がついていて、そこから東京の方を見ると、線香花火のような光がチカチカしていて、次はこちらに来るのではないかと思うと怖かったです。

立川はよく空襲警報が鳴り、その都度、防空壕へ入り、空襲警報が鳴り止むまで避難していました。

世帯単位で避難するので、防空壕の中では怖かった記憶はあまりありませんでした。

それでも、爆弾が落ちた時のドカンという音と、地響き

があつた時は怖かったです。

防空壕についている窓から見てみると、爆弾の破片か何かがたくさん降ってきて地面に落ちるのを見ていました。それに当たったら死んでしまうと思うと、とても怖かったです。

終戦で、玉音放送が流れると分かった時、押入れにあつたラジオを父親が出してきて、家は厳しかったので、正座をして聞きました。子どもながらに涙が出ましたが、もう少し食べ物が欲しかったと思って聞いていました。今思うと、おてんばな子どもだったと思いますし、みんな食べることに苦労していました。

その後、社会へ出て朝早くからいくつかの仕事掛け持

ちしたり、色々と苦勞もありましたが、当時の頃を思い出
し、忍耐力や協調性など身についたかと感じています。

このような戦争は、二度とあつてはいけないと思います。

学童疎開の事

横尾 和子（八十六歳）

学童疎開という言葉をご存じでしょうか。

三月十日の空襲はひどく、お友達の家々も焼かれ、言葉の掛けようもなく立ちすくみ、こわいようでした。国は、あまりの被害に三年生から六年生までをまとめたグループを作り、翌日から疎開させることにしました。私は、東京都港区麻布十番あたりの学童だったように思いますが、まだ三年生では何も分からず、上級生の後についていくのが精一杯でした。佐野と鹿沼という駅に止まったような気がしています。この駅に降りたかどうかは全く分から

ず、だいぶ歩いたような覚えがあります。

着いた先では山門をくぐり、左手に水ためのような大きな池があり、右手の方は体操ができるぐらいの広さがあつたように思います。なかなか広いお寺のようでしたが、廊下の外に木そのままの廊下があり、トイレは外でした。学童用に作ったのかもしれないが、こわいトイレでした。

新しい学期が始まり、私達学童もすぐ近くにあつた学校に行き始めました。そんな中、母からの葉書が届きました。葉書は、先生が読んでくださいましたが、私は先生から急に葉書を奪い取り、自分の部屋で泣いてしまいました。先生はびっくりして追いかけてきました。泣いてしまうほどとても悲しかったのは、先生に葉書を取られてしまうと思

ったからです。これだけがずっと頭に残り、今もあの場面を思い出します。そんなことがあつてお寺の生活や学校にも慣れ、地元のお友達もでき、一緒に夏休みを遊びました。楽しみにしていた夏休みに、思いがけず兄が来てくれました。中学生になり、背が高くなっていてびっくりしました。小学生の時、兄は私の誇りでした。珍しいかりん糖や夏の服など持ってきて、なんとなく鼻を高くし、甘えておりました。そんなある日、私たちは二階の職員室に集められ、正座で終戦の話を聞きました。やつと親の元に帰れるので、喜んでいましたが、中には両親が亡くなった方がおり、複雑でした。

十月二十二日、絶対に忘れられない日です。九歳の子ど

もには、親と会えるこの日をどんなに待ったことでしょうか。その日、父の姿が見えず、先生が心配し、連絡したところ、午後やつと迎えにきました。三鷹から来たので遅れたとのことでした。後は全く覚えがなく、翌日は熱を出し寝ていました。安心したのだと思います。親のありがたさをつくづく感じました。

小学生の作文

戦争や平和について聞いたこと、知ったこと、
思うこと

戦争の苦しき

阿部 百愛

今の日本はとても平和です。ですが、七十八年前、日本は戦争をしていました。戦争では、数百万人以上の人が戦争で命をぎせいにしたと聞いた時は、すごく悲しい気持ちでいっぱいでした。私が調べて知ったことは、戦争はだれも幸せになれないということです。

このことについて、私のおじいちゃんにも聞いてみて分かったことがあります。おじいちゃんは、当時まだ子どもで戦争には行かなかったけど、戦争中は食べ物がなく、ひなんをしていたため、とても生活が苦しかったと聞きまし

た。戦争が終わってからも、食べ物などがなく、とても大変だったと言っていました。

戦争について、調べたり聞いたりして、私が思ったことは、今、私が生活している当たり前のことが戦争中はできなかったんだと思います。たとえば、戦争中はふつうにご飯が食べられたり、家族や友達と過ごしたりすることができませんでしたが、今では、当たり前になってきていてとても幸せだなと思いました。

今でも戦争をしている国があり、昔の戦争時代の日本のように苦しんでいる人がいると思うと、心が痛いです。早く、戦争のない平和な世界になってほしいです。そのためには、戦争のつらさや大変さなどを、まだ戦争のことをよ

く知らない人にも伝えていき、東大和市にある変電所のよ
うに、戦争の歴史を自分が大人になっても伝えていきたい
です。そして、歴史をつなげていきたいです。

命の大切さ

安藤 ひかり

この間、おばあちゃんに戦争のことについて聞きました。おばあちゃんはひいおじいちゃんの話をしてくれました。ひいおじいちゃんは戦争に行って生きてかえって来たそうです。日本がまけたので、夜中ひっそりとかえって来たそうです。私は何かイヤな感じだなと思いました。

それに、ひいおじいちゃんがもし戦争で死んでいたら私も生まれてなかったかもしれない。戦争がなければ、生まれるはずだった子もたくさんいたと思います。生まれてこられなかった子がかわいそうです。そのようなことはあ

つてはならないと思います。

これからの日本の未来は私たち子どもがつくっていきます。毎日、平和のありがたみを知って、一生、戦争がなないようにしたいです。

東大和市の平和

石井 翔真

僕が平和や戦争について知っていることは、都立東大和南公園にある旧日立航空機株式会社変電所についてです。家から都立東大和南公園は近いので何回も変電所に行つたことがあります。

この変電所は戦争によって攻撃を受けました。建物の外壁には、たくさんの穴があります。それを見て思ったことが三つあります。

一つ目は、戦争のすさまじさです。その穴は弾のあとです。壁を貫通しているその威力に、すさまじいものを感じ

ました。二つ目は、変電所のすごさです。戦争で、たくさんの爆弾が落とされ無数の弾を受けているのに今でも残っていて、すごいと感じました。三つ目は、戦争の残酷さです。変電所の硬いコンクリートの壁も貫通する弾丸で人の命が奪われてしまったということに、とても残酷だと思いました。

変電所について調べてみました。そこで知ったことは、「西の原爆ドーム、東の変電所」と言われているということです。また、変電所内を紹介するガイドの人にも色々教えてもらいました。変電所とは何かとか、変電所の役割を教えてくださいたり、戦争の恐ろしさを教えてくださいました。変電所の中には当時の状況が分かる資料などが展示

されています。

そのような建物が身近にあることで、戦争と平和について知ること、学ぶことができました。変電所は、戦争を知らない人たちにたくさんのことを教えてくれる場所です。身近にある旧日立航空機株式会社変電所を大切にしていきたいと思いました。

戦争や平和について思うこと

泉 舞歩

私は、戦争をしてはいけけないと思います。理由は、国と国との戦いで何も罪をおかしていない人が殺されたり、知らない所に連れていかれたりするなど、そういうことを決してしてはいけけないからです。そもそも私の場合は、そういうことをしてまで勝ちたいとは思いません。

今でも戦争をしている国があります。一秒でも早く戦争を終わらせて、戦争が無い地球にしたいです。

そのために私たちにできることは、願う以外にも募金や戦争はダメなことを伝える活動を広げていきたいと思ひ

ます。

これからの未来をだれでも安心安全、幸せに過ごせるよ
うな平和がおとずれてほしいと心から願います。

平和による幸せ

唐沢 怜

今、戦争は世界各地で発生していて、その地域の数は約四十あり、今年、または昨年に一万人以上が死亡している地域もあります。そしてウクライナもその一つです。

私は、戦争のニュースを聞くと胸がいたみます。なんの罪もない人たちが殺されてしまうからです。戦争経験のある、やなせたかしさんは、「自分たちが正しいと思って戦争をする。しかしそれは結局殺し合いだ。正義の戦争なんてないんだ。」と言っていました。私は、やなせたかしさんの言葉を聞いて、戦争は何の解決にもならない、ただり

ふじんに人の命をうばうだけなんだと気づいたのです。

だから私は、戦争は二度とやってはいけないとあらためて思いました。私は戦争のおそろしさを感じました。絶対わすれないこと、そしてこのことを後せいにつたえられるようにしたいと思います。

平和は安心

國松 暁莉

みなさんは、原子力爆弾をご存知ですか。それは、破壊力もすごいのですが、それよりこわいことは、放射能という体にとっても悪い物質を広範囲にぶちまけてしまうこと、放射線は目に見えないし、当たっても痛くもかゆくもないですが、人体をおかしくして、人の命をうばってしまいます。

そんな爆弾をアメリカによって広島と長崎に落とされてしまい、約二十万人が亡くなったと言われています。

その爆弾に興味をもったので、お母さんにいろいろな写

真を見せてもらい、いろいろな話を聞いてみました。画像には、あつすぎて皮膚がとけて、体からつり下がっていて、目もぶら下がっていてとてもびっくりしました。お母さんの話も聞いてみたら、この戦争は七十八年前のことで、私はずっと昔かと思っていたのでびっくりしました。この世では、取り扱うのは禁止されたはずなのですが、ロシアがウクライナに使用しようとして、他の国民は反対していません。

このようなことがない、今の日本はとても平和で過ごしやすいと思います。私は今の日本の状態が続くことを願っています。

戦争と平和

佐藤 壱祈

戦争は何年たっても、平和にしていくためには戦争の「根」を撤廃しないといけないと思います。

そのことが感じられるのは、いつものニュースです。なぜそのような些細なことが、その気持ちに繋がるのかというのと、日々ニュースでは、例ですが、今日二万人が死亡しました、という報道がこのご時世されることがあります。聞いた時は、「かわいそう」などと思いますが、でもよくよく考えてみると、たったの二十四時間で、二万人もの人が、同じ人に殺されているのです。これはとても凶悪だと

僕は思います。昔から人間は争い、戦争をし続けました。例えば、有名な紀元前の戦争といえどトロイア戦争だと思えます。この戦争はトロイアがギリシヤに侵攻した戦争です。この戦争の中でもっとも兵器だったのは、トロイの木馬です。このトロイア戦争の後にも戦争は絶えることなく行われ、戦争の強い国が進んでいる国、先進国と言われている国は、確かに、戦争が強い国は戦車や爆弾など、いわゆる殺傷能力が高い物、人を殺す兵器に時間とお金をひたすら費やしていきました。このように戦争の出来事を見ていくと、世界の歴史は戦争の歴史だということが分かります。

僕は世界の人々一人一人に「戦争」という文化が、強く

根付いているのだと思います。そして、今の世界に深く根付いている「戦争」という文化を、完全に切り離し、新たに、世界の人々一人一人に「平和」という文化の根を築いていき、長い年月をかけてその根を太く、深くしていきながら、その文化の重要さを次世代にずっとずっと繋いでいくことが、今、世界全体で話し合っていかなければいけない課題ではないのでしょうか。

平和をつなげたい

津田 大海

六月二十三日は何の日かわかりますか。ぼくは毎年この日がくると、家族みんなで平和をねがって、おいのりをします。この日は「慰霊の日」といって今から七十八年前に起きた沖縄の地上戦が終結した日です。沖縄県の学校はすべて休校となり、一度と戦争をくり返さないよう平和を願う沖縄県にとって大切な日なのです。

六月は、ここ東京は梅雨ですが、ぼくが生まれ、小学校に上がるまですごした沖縄は、もう梅雨が明け、夏も本番です。セミの大合唱で朝目覚め、おじいちゃんが庭で収か

くしたたくさんのゴーヤを、おばあちゃんがチャンプルや天ぷらにしてくれれます。中でも、サイダーで甘く作られるゴーヤジュースは別格な味で、これを飲むと夏が来たなあと思うのです。

こんな平和な沖縄に七十八年前、地上戦があつたなんて想像できません。その時、おじいちゃんはまだ三歳、空しゅう警報が鳴るとお母さん、つまりぼくにとってのひいおばあちゃんに抱かれて防空壕にひなんした記憶がかすかにあるそうです。おじいちゃんのお父さんは兵隊へいつていたので、畑仕事や力仕事もお母さんと一緒にやり、さとうきびやおいもを食べて空腹をしのいだそうです。そんな過酷な状況を生きぬいてくれたおじいちゃんに心から、あ

りがとうと感謝の気持ちでいっぱいになります。ぼくの名前には、『海のようにだれにでも深い思いやりの心を持つてあゆんでほしい、という願いが込められているんだよ』とお母さんは言います。大好きな沖縄の青い海や自然が、いつまでも美しいままであってほしいです。ぼくはまだ小さな力ですが、思いやりの心を忘れずに、友達と仲良く、先生や家族の教えを聞いていくことで、平和をつなげていきたいと思えます。

戦争と平和

鶴ヶ崎 大和

ぼくは二〇一二年というとても平和な時代に生まれました。ですが、日本は昔、戦争で敵味方問わず、たくさんの方が亡くなりました。顔も知らない人と戦争をしました。同じ星の地球に同じ時に生まれた人間なのに…。

一九四五年八月、広島と長崎に原爆が落とされて、たくさんの方が亡くなりました。広島は、世界で初めて原子爆弾が落とされた場所として有名です。たった一発で何人も尊い命がうばわれました。戦いは人間の宿命だと言う人もいますが、ぼくはちがうと思います。考えがちがうなら

ば話し合いなど解決する方法はいくらでもあると思います。
す。

ぼくのおばあちゃんのお父さんも戦争に行った一人だと聞いています。銃弾が胸をかみつうしたそうです。当時の日本は、多くの人たちが戦場に行ったそうです。そういう人たちがいて、今の日本があることを忘れたくないです。

ぼくの家近くの公園に、戦災建造物の旧日立航空機株式会社変電所があります。小さかったころ、この建物は何だろうと思っていました。学校で話を聞いて、戦時中、銃撃された建物だと知りました。ぼくは、一回だけ中に入ってみたことがあります。当時、働いていた人たちの写真がかざってあり、爆弾が落とされるまで元気に働いていたの

に、爆弾と共にその日常が一瞬で無くなったのかと思うと、胸が苦しくなりました。

この変電所や原爆ドームが今も残されている意味は、このひげきを二度とくりかえしてはいけない、わすれてはいけないということだと思いました。

ぼくは、この平和な社会が当たり前ではないと思います。今も世界では戦争をしている国があります。人が傷付け合ってきた平和は、本当の平和ではないと思います。ぼくは話し合って得る平和こそが本物の平和だと思いました。

戦争と平和

徳山 蒼馬

僕は、戦争を知りません。なので、本当の平和も知りません。そこで僕は平和とは、すべての国が戦争をやめたときに感じることだと思いました。

でも、今でも戦争によって亡くなっている人がいます。そして、今、戦争が起こったら、きっと、長崎や広島に落とされたような原子爆弾が使われると思います。

今、僕たちは安全にくらしていますが、また、どこで戦争が起こるか分かりません。僕は、平和な国に生まれたことに感謝しなければと思うようになりました。そして、命

の大切さを知り、一生けん命生きるということをおぼわすれ
はならないと思えます。いつこくも早く平和がおとずれる
ことを心から願いたいと思えます。

戦争と平和について

元谷 陽奈

私が戦争について思うことは、やっぱり戦争はいかなる理由があっても、絶対やってはいけないということですよ。やることによつて、関係のない人々の命までも奪われてしまふのに、今、ロシアとウクライナは戦争をしてまでも、争っているせいで、ウクライナの死者数は約一万〜一万三千人で、ロシアの死者数は五九三七人で、合計で、約一万八九三七人も命が失われています。それにも関わらず、戦争を続けるのはおかしいと思います。

もう一つ私が思う事は、戦争の恐ろしさや悲しみを後世

に伝えていけるようにしていくということ。です。

戦争と平和について

森本 実彩希

私は、一度平和学習をしたことがあり、戦争は、絶対してはいけないと強く思いました。理由は二つあります。

一つ目は、戦争が激しかった地域や県に行くと、とても心がつらく、若いのに戦地に行かなければならない、大きなけがをしてしまってやりたいことができなかつたりするので幸せになる人なんていない、と思ったからです。

二つ目は、戦争が終わっても被爆してしまった人たちは、被爆のせいで病に襲われたり、障害のせいで差別を受けてしまったりと、とてもつらい思いをしてきたからです。

私は、ずっと平和でいるのがとても大切だと思います。理由は、誰もが戦争をしないことで、この世界が平和になり、誰もが差別を受けることがなくなり幸せで楽しく暮らせるようになると思います。

私は、戦争が二度と起こらないよう、身近な人たちに戦争は恐ろしいもの、原爆は二度とおとしてはいけないものだと伝えていきたいと思いました。ほかには戦争があったことを知る機会があればなるべく参加して戦争のことを知って、平和が大切であることを知ってほしいと思いました。

戦争と平和の繋がり

山本 一花

私は、戦争を経験してこなかったもので、詳しいことは知りませんが、「悲惨なこと」、「残酷なこと」というイメージはあります。ロシアとウクライナの戦争の情報を毎日のように聞いていた時期があり、その度にたくさんの人の大切な命が奪われていき、挙句の果てには国までも崩壊していき、「終戦」以外に、安心、嬉しい情報が全くなくて、とても悲しい日々が続いたことを今でも覚えていきます。

今、私が住んでいる町は、とても平和で、戦争などは考えたこともありませんでした。ですが、ロシア、ウクライ

ナに住んでいた人たちだって、「戦争などが起こるような町ではない。」と思っていたはずです。いくら平和で安心できる町だとしても、気付いた頃には戦争状態だということもあるかもしれません。どのような出来事が原因で戦争などの争いが起こるのかは分かりませんが、たとえばどんなに平和でも、永遠に平和なままだとは限らないということ、ロシアとウクライナの戦争を通して改めて学ぶことができました。

戦争体験映像記録DVD「沈黙の証言者」を視聴したとき、戦争を実際に経験した方々の話を聞いて、やはり嬉しい話などは一切ありませんでした。大切な人を失って、大切な町も失って、日本だけでなく、世界中が辛い思いをし

た過去があるんだと実感しました。

すごく平和で安心感のある日本でも、昔は戦争という争いがあつたということが未だに信じられません。これからは二度と戦争が起きないように、国が永遠に安全でいられるように願い続けていきます。

中学生の作文

戦争や平和について聞いたこと、知ったこと、
思うこと

平和のために僕達ができること

保科 陽紀

僕は、昨年の八月四日から六日まで、東大和市の広島派遣事業に参加させていただく機会を得ました。

特に印象に残ったことは、被爆者による体験講話です。被爆者の田中聰司さんは、一歳半の時に被爆して、五人の家族のうち、四人が亡くなったそうです。その後は、正体不明の病気に悩まされてきたそうです。それでも、田中さんは負けずに今も生きています。

僕は、「なぜ、そんなに大変な目にあっただのに、田中さんは自分から命を捨てなかったのか。」と思いました。も

し、僕が七十八年前の広島に生きていて、田中さんのように被爆し、家族を失っていたら、生きる気力を失ってしまったらと思うます。

僕は、それでも強く生きた田中さんが言った言葉が、とても印象に残っています。それは、「平和でないと、何も叶わない。」という一言です。自分が生きている時代が戦争の時代だったら、まず生きること必死で勉強どころではないし、明日生きているかも分からない中で、将来の夢をもつことすらできないと思います。田中さんは僕に、「平和は全ての基本だ。」と気付かせてくれました。

僕にとっての平和は、大切な人と何気ないことで笑い合っ、当たり前前の暮らしができることです。そして、生き

ることに苦しみを感じる人がいなくなり、誰もが人間らしく生きていけることだと思います。また、将来の夢をもち、勉強やスポーツ、趣味など、やりたいことに目標をもって打ち込めることだと思います。

そのような平和な世界になるためには、まず一人一人が戦争をすることや、核兵器の開発、実験、使用に反対し続けることが大切だと思います。

そして、平和は自然にあるものではなく、多くの人の犠牲の上に成り立っていることを心にとめて、「平和を守る。」という意識を常にもつことが大切だと思います。

次に、自分の意見だけでなく、他者の意見をよく聞き、大切にすることが重要だと思います。それは、他者の立場

や気持ち想像し、寄り添うことです。そうすれば、他者のことを自分のことに置きかえて考えることができます。そのような、他者への思いやりの気持ちをもって生きていきたいです。そして、もし他者と上手く意見が合わない時は、自分の意見と他者の意見を比べて、良いところや似ているところを見つけ出していけば良いのだと思います。

最後に僕は、正しい方向に国民を導く、良い国の代表者を選ぶことも大事だと思います。決して武力ではなく、話し合いで物事を平和的に解決できるような、国の代表者を選ぶことができるのは、他でもない自分たちです。だから、政治に関心をもち、十八歳になったら必ず選挙に行きたいです。

戦争や核兵器をこの世からなくし、平和な世の中を守るためには、たくさんの方の力と努力が必要です。一人一人の力は小さいけれど、世界の人々と手を取り合い、知恵や意見を出し合って、戦争や核兵器に対して反対の声を上げ続けられれば、いつか必ず戦争や核兵器を世界からなくすことができると思います。

僕は、この経験から学んだことを、普段の生活の中で実践し、世界の平和のために自分ができることを考え続けていきたいです。

東大和市平和都市宣言

平成二年十月一日 宣言

恒久平和の実現と、核兵器の廃絶は、全人類共通の願望である。

世界の世論のたかまり、各国の相互理解により、核兵器の廃絶にむけて曙光が見えてきたとはいえ、依然として地球上には多くの核兵器が貯えられている。

世界で唯一の核被爆国の国民として、また、国際社会の平和と協調を理念とする憲法をもつ国の国民として、人類の安全と幸福のために、地域紛争を含むすべての戦争の防止と、あらゆる核兵器の廃絶を心から願

うものである。

ここに、平和を愛する全世界の人々と手を携えて、戦争と核兵器のない世界の建設にむけて努力することをあらためて誓い、東大和市が平和都市であることを宣言する。

東京都東大和市

東大和市戦争体験映像記録

「沈黙の証言者」 ～ 私たちのまちは戦場だった ～

東大和市では、戦後七十年の節目の年に、平和の大切さを再認識するとともに、戦争を風化させることがないように、旧日立航空機株式会社に勤務されていた方々の戦争体験談、旧日立航空機株式会社変電所の歴史や現在の姿をまとめた映像記録（DVD作品）を制作しました。

6人の戦争体験者の生々しい証言と貴重な資料をもとに、変電所の歴史や東大和市の戦争の記憶をたどります。

※本作品のDVD（48分）を市内図書館、市役所生涯学習課で貸し出しています。
※ダイジェスト版（12分）が、インターネットで視聴できます。

YouTube「東大和市公式動画チャンネル」にアクセスするか、左記「QRコード」からご覧ください。

QRコード



戦後70年 東大和市 戦争体験映像記録

沈黙の証言者

～私たちのまちが戦場だった～



戦災建造物
旧日立航空機株式会社変電所
(東大和市指定文化財)



令和五年度 平和文集

「いま、語り継ぎたいこと」

～戦争と平和～

令和五年八月発行

編集・発行 東大和市 教育部 生涯学習課
印刷 有限会社アルファ―オフィス